洞ってどんなところ？

名鉄瀬戸線尾張瀬戸駅のある中心市街地から東におよそ1㎞に位置する洞（ほら）地区は、江戸時代には瀬戸村に属していました。19世紀以降、瀬戸村がやきもの生産の最盛期を迎える中、洞でも長大な連房式登窯が建ち並び、盛んに陶器生産が行われていました。

同じ頃、磁祖加藤民吉によって磁器の製法が伝えられると、瀬戸村の各地域では磁器製品を生産する窯屋の数が陶器生産を行う窯屋よりも多くなっていきますが、他の地域に比べ陶器づくりにこだわる気風があり、現在に至るまでその伝統が引き継がれています。そして、洞の随所でみられる窯垣は、やきものづくりに生きた洞の職人たちの息吹を感じさせてくれます。

まちなかに溢れる幾何学模様を探してみよう！

幾何学模様に出会えるまち

瀬戸には、まちなかの至るところにやきもので彩られた幾何学模様があります。その代表的なものが「窯垣」です。「窯垣の小径」でも様々な窯垣をみることができます。また、窯垣の小径以外にも市内には瀬戸川沿いを中心に約600か所の窯垣があります。

窯垣とは、登窯や石炭窯などでやきものを焼く時に使われたエンゴロや棚板、ツクといった大量の「窯道具」の廃材を、職人たちがやきものづくりの合間をみて、土圧に耐える頑丈な構造につくり上げた垣根、土留め、建物の基礎のことを指します。高いもので約4m弱、長いもので約30mもありますが、大小多様な形状の窯道具を組み合わせて相互に固めることで、セメント等の接着剤を使わずに積み上げられています。丸や四角、板状や筒状の多様な形をした窯道具を組み合わせ積んだ幾何学模様の窯垣。瀬戸のまちなかを散策しながらお気に入りの窯垣を見つけてみませんか。

宝泉寺本堂

1 宝泉寺

宝泉寺は今から約760年前の建長4（1252）年に霊水山神宮寺として創建されましたが、その後300年の来歴は不明で、慶長元（1596）年には火災により焼失したとされています。その後、寛永10（1633）年に、赤津の雲興寺15世興南和尚により、当地に曹洞宗の禅刹大昌山宝泉寺が開かれました。

本堂には本尊釈迦無尼如来、観音堂の1階には千手千眼観音菩薩像が祀ってあり、その2階は修行僧たちの修行の場である座禅堂になっています。毎年11月には「お薬師さん（あめんぼまつり）」が盛大に行われます。

山門

山門は全国でも珍しい上下二重構造の竜宮造りとなっています。階上部分は以前は鐘楼として使用されていました。

鐘楼

第二次世界大戦の折、金属不足により梵鐘が供出されましたが、その後、昭和27（1952）年に檀家の寄付により再建されました。「天女の図」が鐘楼の天井に描かれています。

首なし地蔵

山門を入るとすぐ左に、首のない地蔵があります。江戸時代、当時の役人が隠れキリシタンを探す目的で切り落としたのではないかともいわれています。

渡辺幸平の石碑

もともとは四国高松藩の下級武士だった渡辺幸平は、藩を出て京都にて鋳鋼型師となります。その後、瀬戸では陶祖公園にある陶祖碑の建立に尽力し、彫塑の技法を後進に指導するなど「陶彫の祖」と称されました。

陶質十六羅漢塑像（市指定文化財）

天保14（1843）年に加藤善右衛門（弘法善治）により制作されました。一般的には木製が多い中、この像は陶器でつくられ、袈裟衣には織部や黄瀬戸など、瀬戸ならではの釉薬が施されています。

天井絵

本堂の天井に、瀬戸の陶磁器の絵付職人によって描かれたとされる天井絵。慶長元（1596）年の火災の際に一部焼失し、再建時に再度つくられました。現在は新旧200枚の絵があります。